



生態系の基盤をなす植物たちの世界 鳥取の豊かな自然環境をフィールドに 多様な生物間相互作用を解き明かす

植物と昆虫の関係から 生物多様性の仕組みを考える

植物は昆虫に蜜を提供する代わりに花粉を運んでもらいます。良好なパートナーシップを結んでいるように見える両者でも、実はその関係はたいへん複雑で、植物はさまざまな戦略によって昆虫の行動を制御し、一方の昆虫は少しでも効率よく植物を利用しようとします。例えば、本当の雄しべとは別に花粉のない偽の雄しべを作り、その色を派手にすることによってハナバチを引き寄せる植物がいるかと思えば、花の奥深くに蜜を分泌する植物に



▲花蜜を花の奥に分泌するトキワイカリソウ

対し、外側から穴を開けて蜜を盗み取ってしまうハチもいます。このような植物と昆虫の多様な相互作用を研究することは、生物多様性を理解するために非常に重要です。

大山や鳥取砂丘をフィールドに 自然界の謎解きにチャレンジ

野生動植物の研究をする上で、大山のような山岳から鳥取砂丘のような海浜まで、多様な環境に恵まれた鳥取はとても魅力的なフィールドです。図



▲ツリフネソウの花に穴を開けて蜜を盗むクマバチ

鑑を持ってフィールドに出かけ、地道に植物や昆虫の種名を覚えていくと、自然を見る目が大きく変わります。私の研究室に所属する学生は、大山や鳥取砂丘はもちろん、他県の山岳でも精力的に調査に取り組んでおり、着実にスキルアップしています。いろいろな工夫をしながら調査や実験をし、たくさんの失敗や空振りを繰り返すうちに、植物と昆虫の間にある驚くような相互作用を解き明かすことができるはずで



▲大山で植物生態調査の実習



環境学部

Tetsuya Kasagi

笠木 哲也 准教授

時代の変わり目は 研究を始めるチャンスです

専門家に予測できない事態が起きたとき

私が大学に入学したのは1989年、すでに地球環境問題は大学入試の頻出事項になっていましたが、入学してみると文系科目の関連授業は問題が新しすぎて学内の先生には担当できず、新聞編集委員が非常勤で教えていました。また、同年6月の中国での天安門事件や、同年秋の東欧革命による冷戦終結など、専門家たちも事前に予測できなかった事態が相次ぎました。中国や国際関係論を研究する先生たちの途方に暮れた表情は「今



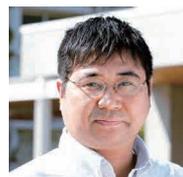
▲2002年末から2003年にかけてのSARS終息後、体を鍛えるのが感染症対策になるという趣旨で中国各地にできた、成人用の体操用器械。
(2005年11月、中国河南省の田舎町)

から頑張れば同じ土俵で勝負できるかも」と錯覚するの十分でした。

もちろん、相手はプロですから、学生の錯覚よりも早く立ち直っただけではなく、その過程で歴史を参照せよという教訓を示し、後年それを著作にまとめた先生もいました。また、学生のみならず社会からも要請がある、と判断されれば、数年後には欠けていた分野の専門家も——上記の新聞編集委員も含め——専任教員として大学に加えられました。ただ、錯覚の方も私1人だけではなかったよう



▲2013年早春に深刻化したPM2.5をはじめとする大気汚染で、北京では、それまで珍しかったマスク姿が急増。コンビニでも当然のように売っていた。
(2013年2月、中国北京市)



経営学部

Yasushi Aikawa

相川 泰 准教授

で、きちんと調べてはいませんが、研究会や学会で、私と近い世代の、文系の環境研究者も、中国研究者も、国際関係研究者も、前後の世代より多いと実感しています。私の研究の中心は中国の環境問題についてで、その専門家といえる人は日本にそう多数はいないものの、その半数あまりは私と数年しか年齢の差がありません。

新しい事態は 過去そのままの再現ではない

新しい事態に対して専門家の立ち直りが意外と早かったのは、歴史の参照、つまり、一見、新しく見えることも時間軸を長くすると実は意外と人間社会に経験がある、ということに加え、人生経験の長さの力もあったでしょう。とはいえ、やはり新しい事態は過去そのままの再現ではありません。もちろん、今この話をするのは、新型コロナウイルス問題が起きたからで、今度はこちらも専門家として、学生の皆さんから「同じ土俵の勝負」を挑まれる覚悟をしています。